



秋深まる 11 月、マーシャル諸島共和国のアルフレッド・アルフレッド Jr. 資源開発大臣が訪日した。今年の初めに大臣に就任してからは、3 度目。帰国前日の忙しい中、滞在先のホテルを訪ねて、大臣としての抱負や日本への期待を聞いた。

◎ 大臣ご就任、おめでとうございます。今回の訪問目的は何でしょう？

アルフレッド大臣(以下大臣):ありがとうございます。「東京の夜はもう寒いですね」(日本語)。今回の訪問目的は、日本企業の視察でしたが、1 週間という短い滞在で、仙台、焼津、東京をまわる非常にタイトなスケジュールでした。ただ、日本に来るといつも感じるのですが、何だか「お帰りなさい」と言われているような気がします。自分にとって、日本が第二の故郷なのだと思えてくる瞬間です。

大臣は、1966 年生まれ。アルフレッド家は、マーシャル諸島イルック環礁でも有数の名家である。母親は同環礁地方政府の元市長で、長兄も公共事業大臣を務めたことのある同環礁を選挙区とするベテラン議員だ。他の兄弟も、クワジェリン基地に関する対米交渉官やマジュロ病院事務局長など、この国の重要ポストを担う者ばかりである。

母方の祖父は日本人で藤田姓だった。小さい頃から自分にも日本人の血が流れていることを聞かされてきたので、自然に日本を意識するようになっていた。マイクロネシア地域の名門ハイスクールであるザビエル高校を卒業して、日本の国費留学生として来日。そのため、日本語は堪能だ。

◎ 高校卒業後に、米国ではなくなぜ日本を選んだのですか？

大臣: 祖父が日本人でしたので、自分のルーツに関しても確かに関心はありました。しかし、一番の理由は、道路や建築など、社会インフラ整備の技術を日本から学びたかったのです。日本の技術を学び、新しいマーシャルの国造りに貢献したかった。

日本では、土木施工を学んだ。当初は、日本の習慣に戸惑うことばかりだったが、次第に日々の生活に慣れてくると、友達も増えて楽しいことが多くなっていった。

◎ どのような留学生活だったのでしょうか？

特別インタビュー

マーシャル諸島共和国 資源開発大臣

アルフレッド・アルフレッド Jr.

【略歴】

1966 年生まれ。財務省銀行局長、駐日マーシャル諸島大使館参事官を歴任。

大臣: 勉強は毎日大変でした。それでも週末は、友達とカラオケに行ったり、いろいろなイベントに参加して、とても充実した学生生活でした。特に、後楽園球場(現東京ドーム)でプロ野球を見たのが印象深い思い出です。マーシャルの野球は日本から伝わったものなので、本物の「ヤキウ」(マーシャル語で野球は「ヤキウ」)を見ることができて感慨深いものがありました。

留学後にマーシャルに戻り、在マーシャル日本大使館の立ち上げに協力。その後、財務省銀行局長のポストに就く。この時代に上司だったサエコ・シュニバー財務次官も日系人で、政府支出に対して厳しく査定していく彼女の姿勢から多くを学んだ。当時、太平洋の島嶼諸国の多くがマネーロンダリング補助をしているのではとの国際社会から疑惑の目が向けられていた。これを払拭するため、銀行局長として国内銀行に対して厳しい監督行政を行った。その後、在京大使館の参事官として来日し、日本人脈を活かして大使館業務を活性化させた。

◎ 在京大使館時代の思い出をお聞かせください。

大臣: 一番心に残っているのは、2010 年に他の在京島嶼国大使館と協力して「太平洋諸島フェスタ」を開催したことです。その時は、マーシャル大使館が議長国で、イベント準備のために太平洋諸島センターや笹川平和財団のスタッフらと毎晩遅くまで議論をしたのが、思い出されます。イベントを成功させたときには、無事に成し遂げたことへの安堵感とともに、仲間と協力し合えば難しい事業も成功すると、自信を持つことができました。

2011 年に帰国すると、いきなり財務次官という重要ポストに就いた。2000 年代の後半以降続いていた国内不況の中で、厳しい政府財政の立て直しは急務であり、その重責に応えられるだけの人物は彼しかいなかったのだ。

次官就任後は、モモタロウ財務大臣(当時)と協力し、財政再建に向けたプログラムを策定。無駄な支出に対しては、厳しい姿勢で対応した。その行政手腕は、地元新聞報道などのメディアを通じて国民に知らしめられ、若い世代からの支持も高まっていった。

◎ 政治の世界への転身を意識し始めたのは、次官の仕事を通してでしょうか？

大臣: 政治家になることを意識しはじめたのは、2014 年頃でしょうか。先行きの見えない国内不況の中で、政治の世界に新しい風を求める若い有権者たちの動きが高まっているの

を感じたからです。周りの仲間からも、若い世代が政治を引っ張っていくことが必要で、是非その担い手となって欲しいとの声がたくさん寄せられました。こうした仲間たちの思いが、政治への挑戦を決断させました。

とはいえ、政治家への転身は決して容易ではなかった。まず、現職国会議員らが急遽定めた立候補規定により、選挙前一年間は財務次官を無給で休職しなければならなくなった。また、出身地アイリンラブの選挙区事情も、新人には厳しかった。定員 2 名の選挙区には、現職大統領と建国以来連続当選を続けてきたベテラン議員が確固たる地盤を固めていたからだ。

◎ いきなり選挙で、勝算はあったのでしょうか？

大臣: 二人の現職議員が強いことは、十分に分かっていました。ただ、実際にアイリンラブ環礁の各地に何度も足を運んで、地元の若者たちと車座になって話していると、この国を変えたいという彼らの気持ちがひしひしと伝わってきたのです。そして若者たちの思いが、自分に対する期待につながっていると感じたのです。だから、今度の選挙に当選するか否かよりも、若い世代の考えを代弁する役割を自分が果たさなければならない、との使命感が強くなりました。

選挙戦が始まると、アルフレッドへの期待は具体的な支持運動となって表れ、その動きはアイリンラブはもちろん、マジュロやイバイなど都市部の有権者たちにも拡大。その結果、選挙当初の下馬評では現職が絶対優位と見られていたが、次第に三つどもえの激しい選挙戦となっていた。

そして投票と開票(2015 年 11 月)。アイリンラブ選挙区は、最後の一議席をめぐる接戦の日々が続いたが、在外投票が開票されると一気にアルフレッドが抜き去って当選した。政治を変えたいと思う若者らの気持ちが、新人議員の当選という形で実ったのである。

政治の変革を求める声は、他の選挙区でも高まっていた。この選挙で当選した新人議員は全議席の 3 分の 1、この若い力がヒルダ・ハイネ政権を誕生させたと言っている。そして、そのリーダー役となって働いたのがアルフレッドだった。

◎ 資源開発大臣は、漁業問題、エネルギー政策、そして観光促進に至るまで多岐にわたります。この重要ポストに就いて、今のご心境はいかがでしょう？

大臣: 就任前から様々な課題を抱えるポストであると、認識はしていました。あだ、実際になってみると、「タイヘンデスネ」(日本語)。漁業に関しては、日本をはじめとした多くの国々と個別に協議を行うと同時に、FFA(フォーラム漁業機構)やナウル協定国との会議など多国間の交渉にも参加しなければなりません。

また、マーシャルにとって、コプラ生産はとても重要です。特に離島では数少ない現金収入の手段ですから、安定的な生産と収入が続くように、国際市場の価格変動を注視していく必要があります。

◎ 新しいビジネスの視点から、どのような分野の産業促進を重視したいとお考えですか？

大臣: マーシャルは小島嶼国ですから、産業を起こすと言ってもそのバリエーションは限られているという現実を十分理解しております。だから、産業として可能性のある産品を、いかにマーケット需要に応えられるものにしていくかポイントだと考えています。

例えばココナッツオイルについては、日本を含めた国際的なマーケット需要に応えられる品質基準やパッケージ装飾を提供できるかが重要になると思います。そのためにもマーシャルの企業を日本に派遣して日本のニーズを学んだり、日本企業とジョイントベンチャーを組んでその技術力やブランド力を生かしたマーシャル産品を作り出すといったいろいろな試みを実施していくつもりです。今の時点では、鯉節やココナッツオイルについては、日本企業との協力を具体的に進めていくことができると考えています。

◎ ホンダ自動車と貴政府とによる電気自動車の共同実験がスタートしたと伺いましたが？

大臣: これは、ソーラーパネルで発電し、それをエネルギーにして電気自動車を走らせるという実験プロジェクトです。私が財務次官のころに重要プロジェクトとして取り上げた試みですから、極めて強い思い入れがあるのですが、お陰様で順調に推移しております。来年からは第 2 フェーズに入る予定で、車の台数も現在の 3 台から大幅に増やそうとしているのですが、これこそまさに日本とマーシャルが協力して創り上げる象徴的プロジェクトだと言えましょう。

◎ 観光業の促進についても、何か具体的な戦略を考えておられるでしょうか？

大臣: マーシャルの美しい珊瑚礁の海は、世界のダイバーたちにとって魅力的な場所です。これまでクローズしていた日本人経営のダイビングショップも再開し、現地でのダイバー受け入れ態勢は徐々に整ってきております。

それゆえに、これからは積極的に展示会などへの参加にも取り組んでいき、観光局の増大に努めていこうと思います。4 月には東京でマリンダイビングフェアが開催されますが、マーシャル諸島政府観光局(MIVA)も単独で出展することを決めました。こうしたことを積み重ねながら、是非多くの観光客の方々にマーシャルの魅力を知ってもらいたい。

◎ 最後に、日本の友人たちへのメッセージをください。

大臣: 日本の企業と協力して新たな産業を生み出していきたいと願う私にとって、今回はとても意味深い充実した訪問になりました。マーシャルから見ると、日本はとてつもなく大きな国ですが、太平洋を共有する同じ島国として、技術はもちろん、仕事への取り組み姿勢など多くのものを学ぶことができていると思います。そして私自身も、資源開発大臣として、両国が協力し合っるとともに利益を生み出すような交流が実現していくよう全力で取り組んでいきたいと思っています。それは、日本を第二の「故郷」だと思っている私の使命だと考えているからです。それゆえ、これからもしばしば日本に戻ってくることを思いますが、今まで通り「おかえりなさい」という気持ちで迎えてもらえる大変嬉しい。どうぞよろしくお願いたします。

国の将来を見据え、小国の産業育成に向けた戦略を語るときの真剣な眼差しは、太平洋の荒海の中で生き抜いてきたマーシャル人としての矜持がうかがえた。同時に、会話の間に見せてくれる優しい笑顔と、丁寧な質問への受け答えの真面目さからは、日本人らしく感じずにはいられなかった。若者による政治改革が進むマーシャルのリーダーとして、アルフレッド大臣の活躍をこれからも見守っていきたい。

(インタビュー・文責: 黒崎岳大(客員研究員))